

鼠径ヘルニア嵌頓 3 名男、大腿ヘルニア嵌頓 4 名女性うち腸管切除 3 名、閉鎖孔ヘルニア 8 名女性、腸管切除 5 名、臍ヘルニア 1 名うち腸管切除 1 名、大腸穿孔 5 名男性 2 名で、癌の穿孔例は 62 病日退院いたしたが、特発性穿孔の 1 例は 59 病日死亡した。女性の穿孔例のうち特発性の 1 例は 2 病日死亡、1 例は 57 病日退院。大腸内視鏡による穿孔例は 24 病日退院した。直腸癌による閉塞例は男女 1 名ずつあり、男性は 14 病日死亡、女性は人工肛門造設の上 3 期手術を行い 64 病日退院した。SMA 血栓症は男性 1 名あり、150 病日退院。絞扼性イレウスの女性 2 名は 12 病日と 19 病日に退院した。虫垂炎穿孔の女性は 8 病日と 17 病日に退院、男性は 16 病日透析のため転科と 28 病日に退院した。

80 歳以上の手術総数増加は主に鼠径ヘルニア、内痔核手術の増加によるものであり、80 歳以上の緊急手術例は予定手術例の比例した増加は示さなかった。これは当院の地域性による影響が多いと考えられた。

7 80 歳以上高齢者腸閉塞手術症例の臨床的検討

登内 晶子・須藤 翔・大谷 哲也
眞部 祥一・堅田 朋夫・石野信一郎
岩谷 昭・横山 直行・山崎 俊幸
桑原 史郎・片柳 憲雄

新潟市民病院消化器外科

【目的】高齢者腸閉塞症の手術治療上の問題点を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】過去 4 年間に当院救急外来を受診し、腸閉塞で手術が施行された 172 例を対象に、80 歳以上（高齢者群、 $n = 64$ ）と 79 歳以下（若年者群、 $n = 108$ ）の 2 群に分け治療成績につき検討した。術後合併症の重症度基準には、Clavien - Dindo 分類を用いた。

【結果】高齢者群の腸閉塞は、単純性 19 例、複雑性 44 例、麻痺性 1 例であった。術式は、小腸切除 23 例、ヘルニア根治術 20 例、癒着剥離術 17

例、その他 4 例であった。高齢者群の 50 例（78%）は併存疾患があり、若年者群より有意に高率だった。高齢者群の 30 例（48%）に術後合併症を認め、7 例（11%）に死亡を認めた。高齢者群は、在院期間、ICU 滞在日数、呼吸器装着期間は、有意に延長していた。術後合併症の頻度、合併症の重症度（grade III 以上）には両群に差がなかった。

【結語】80 歳以上の高齢者は術前併存疾患が高率で、腸閉塞症手術では、術後 ICU 管理の重要性が示唆された。

8 当科における高齢者の腹部救急疾患

廣瀬 雄己・下田 聡・武田 信夫
田中 典生・小山俊太郎・丸田 智章
塚原 明弘・丸山 智宏

県立新発田病院外科

平成 9 年 1 月から 24 年 12 月までの 15 年間の当科における高齢者（80 歳以上）の腹部の緊急手術症例について検討した。5 年毎にみると症例は増加傾向にあり、いずれの時期も 70 歳代が最も多かった。それぞれの年代に 80 歳以上の占める割合は 8.8%、17.5%、21.2% と増加傾向にあった。全体では男性が女性の約 1.4 倍だが、80 歳以上では女性が男性の約 1.8 倍と多かった。疾患は腸閉塞、腹膜炎が全体の約半数を占め、80 歳以上では約 66% と多い傾向にあった。腸閉塞の原因は絞扼性イレウス、閉鎖孔ヘルニア、大腿ヘルニアが多かった。腹膜炎の原因は大腸穿孔が多かった。当科での状況について報告する。